

# シモーヌ・ヴェイユの工場体験

脇坂 真弥

(東京理科大学理工学部教養・准教授)

## (和文要旨)

本論文ではヴェイユの工場体験を取り上げ、彼女がその体験を周囲の人々に対してばかりではなく、自分自身にもうまく表現できなかった理由を探る。彼女は3ヶ所の工場で約8ヶ月間労働し、「人間が物になる」という非人間的な状況を体験するが、周囲はそれを彼女の個人的体験だと考えてしまう。それはなぜだろうか。

手掛りは彼女の体験そのものにある。ヴェイユは人間の行動には遂行のエネルギーを与える動機が必要であり、人間はこの動機を自由に選択すると述べる。これはカントが「選択意志の自由」と呼んだ問題である。近代工場労働はこの人間の自由を巧妙に篡奪し、当事者を「人が物になる」体験の共犯にしてしまう。この共犯意識から生じる当事者の有罪感(自身への侮蔑)が当事者の魂に亀裂を生み、体験を表現する言葉を奪うのである。

さらに、この体験を通じてヴェイユが回復したと語る尊厳も不可解である。なぜなら、彼女は人間が完全に物になることこそ真の人間の尊厳だと結論するからである。この結論は奇妙だが筋が通っている。このような状況にある人間は「高い」動機を回復することはできない。それゆえ彼らが尊厳を取り戻す方法はただ一つ、動機を持たないことである。これは彼らが人間としての自由を放棄し、完全に物になることを意味している。

## (SUMMARY)

This paper is to examine the factory-labor experience of Simone Weil and to find the cause of her difficulty to describe her experience not only to others but also to herself. Weil, who worked in three factories for about 8 months, experienced the inhumane conditions which she described with the phrase “a human becomes a thing.” However people around her took it as nothing more than her own personal experience. Why did she find it so difficult to describe?

One clue can be found in her hard experience as such. Weil said that any human action required a motive which provided the necessary energy for achievement. People voluntarily select the motives for their behaviors. Kant calls this “the freedom of the arbitrary will.” Modern factory work takes skillful advantage of this human freedom and makes the very person who becomes a thing a partner in guilt of this experience. In this

way a consciousness of guilt (deep contempt for self) comes into being. This consciousness produces fissures within the person's soul and deprives him or her of the language to describe the experience.

Moreover the dignity which Weil said she found again through her hard experience is very difficult to understand, since she concluded that the true dignity of the human being was to become a thing fully and completely. This conclusion is seemingly very strange, but makes sense. People in this situation cannot have a "high" motivation again. So the only way to restore their dignity is to have no motivation. This means that they abandon their freedom as human beings and become things fully and completely.

## 1 . 序<sup>1</sup>

一九三四年十二月から一九三五年八月にかけて、二十五歳のシモーヌ・ヴェイユはリセの哲学教授を休職し、身分を隠してまったくの未熟練工（プレス工、フライス工）として働いた。彼女が最初に職を得たのは、知人に紹介されたアルストン社の工場である。途中一ヶ月以上の病気休暇を含めて、ヴェイユはここで約四ヶ月を過ごした。その後アルストン工場を解雇されたヴェイユは、一週間後には別の知人を介して次の工場へ転職するが、そこも一ヶ月に満たずに解雇される。それから約一ヶ月間、失業者としてさまざまな工場の面接を受け、ようやくルノー工場に入ったヴェイユはそこで約二ヶ月働いた<sup>2</sup>。

この体験が、後の彼女の不幸論や宗教論にとって非常に大きな意味を持つことは

<sup>1</sup>凡例：

Simone Weil, *La Condition ouvrière*, Gallimard, 1951 (la présente édition, 2002) からの引用は、略号を用いず、直接頁数を示した。訳文中の〔…〕は省略、( )は原語の表示、[ ]は筆者による補足、傍点は筆者による強調である。その他のヴェイユの著作からの引用は、以下の略号の後に直接頁数を示した。

OC -1 *Œuvres complètes, Cahiers*(1933 - septembre 1941), Gallimard, 1994.

OC -2 *Œuvres complètes, Cahiers*(septembre 1941 - février 1942), Gallimard, 1997.

AD *Attente de Dieu*, Fayard, 1966.

<sup>2</sup> ヴェイユの工場労働の詳細な日付については、以下の文献の第 部第一章にくわしい記述がある。Simone Pétrement, *La vie de Simone Weil avec des lettres et d'autres textes inédits de Simone Weil*, Fayard, 1973.

間違いあるまい<sup>3</sup>。たとえば、工場体験の約六年後、ヴェイユは「ルノー工場での身分証明書」を工場における物と人間との役割の逆転を指し示す一つの象徴として捉え、不幸と深い関わりを持つ「しるし (signe)」だと書き残している (OC -1 220)。工場では部品に「名前、形、原料」が明記され、固有の「戸籍」のある人間のような扱いが与えられる。他方、労働者は、「番号」を胸につけた写真を貼った身分証明書を提示しないと工場に入れない (336)。ヴェイユは身分証明書を、物と人間とのこのような逆転を暗示する、不幸のしるしとして捉えた。また、彼女が工場体験の最中にバス車内で得た「奴隷である、この私」(150) という強烈な自覚が、その直後のポルトガル旅行での宗教的確信、すなわち「キリスト教はとりわけ奴隷の宗教であり、奴隷はキリスト教に執着せずにはいられず、なかでも私はそうである」(AD43) という彼女の言葉の基底にあることは否定できない。

しかし、このように後の思想展開の要となるヴェイユの工場体験には、根本的な伝わりがたさが常につきまとっている。その伝わりがたさは、彼女の体験に接した周囲の人々の言葉から窺い知ることができる。人々は、彼女の体験とそこから得た認識は彼女個人のもので、決して一般化・正当化できないと受け取る傾きがあった<sup>4</sup>。たとえば、ある友人は「彼女の判断は公正ではありえない。なぜなら、彼女は

<sup>3</sup> 工場体験等のヴェイユの社会的・政治的問題への過激な関わりは、その生涯末期の深く沈潜した宗教的論考との対比から、時に「二人のシモーヌ・ヴェイユ」説を導くほどの解釈の難しさを生んでいる。彼女の思想にこのような断絶を見ることを注意深く避け、カントやプラトンの形而上学との関連からその思想を一貫した哲学体系として読み解こうとする Miklos Vetö, *La métaphysique religieuse de Simone Weil*, L'Harmattan, 1997 にあっても、工場体験のくわしい考察は行われていない。これに対して、小論は、ヴェイユの思想がどこまでも「体験」と一体になっている点に注目する。ヴェイユの思想は、彼女の具体的体験を光源として見る時、ある明確な形を持って私たちの前に現れると思われるからである。この「体験」は工場労働やスペイン内戦への参加、ソレムでの宗教的体験などさまざまな形をとる。しかし、いずれの場合もヴェイユは、自分の体験が語る以上の事柄を体験に付け加えることを意識的に避ける。この知的誠実さがもっとも色濃く現れ、自覚的な言葉にまで昇華したのが、洗礼をめぐるペラン神父とのやり取りだろう (AD13-84)。小論はヴェイユにおける思想と体験のこの特殊な関わりに着目し、工場労働がその思想に与えた形を、人間の動機選択の自由という哲学的観点から分析する。ヴェイユのさまざまな言葉 (たとえば結びで取り上げた「魂の半分を失う」) は、体験とのこうした詳細な突合せを経てはじめてその意味が正確に理解されると筆者は考える。なお、ヴェイユの工場体験およびその前後のこの体験に関わる状況について論じた先行研究としては、富原真弓『シモーヌ・ヴェイユ 力の寓話』、青土社、2000年、第二章 (pp. 53-85) が挙げられる。ここでは、ヴェイユが工場体験後にロジエール鑄造工場の技師長と交わした書簡や工場機関紙に寄稿した文章を軸に、当時のヴェイユの思想が広範に扱われている。

<sup>4</sup> 人々との間に交わされた手紙の中に、この「一般化できない」という問題に対する彼女の反論が散見される。しかし、それは常に非常に言いにくそうな調子を伴っている (cf. 217, 242, 283)。

普通の労働者よりもはるかに苦しむのだから」と言ったという<sup>5</sup>。この友人は、ヴェイユが工場労働から得た判断を、ヴェイユという普通よりもはるかに苦しむ特別な人間、すなわち、生真面目で誇り高く、体の弱い、生来の不器用さを持った人間ゆえに生じたものとして捉えたのである<sup>6</sup>。

これに対して、ヴェイユは、自分には「ほとんど無限の適応能力」(54)があり、そのおかげで「自分が労働者階級の中をほっつき歩いている<哲学教授資格者>であることを忘れ」(54) 過去も未来もずっと工場で働く人間だと感じるまでに一介の労働者になりきった、と述べている(217, 342f. )。しかし、ヴェイユがいかに「自分には見える」「自分だからわかる」と言おうとも、それは決して彼女の体験が正当であることを保証しない。むしろ、彼女のこういう言葉は、「おまえの体験は個人的なものでしかない」という周囲の視線に対して、それに反論する論理が自分がないことを認めながらも、それでもなお何かを言おうとする、彼女自身のある種の表現のしがたさの表れのように思える。

しかし、なぜヴェイユの体験はこれほどまで周囲から疑われ、危惧されねばならなかったのだろうか。また、それに対して彼女がさまざまな弁明や説明を繰り返しながらも、何か最終的に自ら口ごもるような様子が見られるのはなぜだろうか。一年にも満たない就労期間、哲学教授としての社会的地位、彼女の個人的資質など、その理由はいろいろと考えられるだろうが、もっとも根本的には彼女が伝えようとした事柄そのものの持っている性質が、こうした伝わりがたさの震源であるように思われる。

ヴェイユによれば、彼女が体験したのは人間が人間でありながら同時に「他人の意志に委ねられた一つの物」(273)になる体験である。彼女は後に、「工場での労働者は、自分自身の不幸について自分で書き、話し、考えてみることさえほとんどできない」(328)と述べる。この主張が正しければ、当事者は、自分が被った「人間が物となる」という体験の真相を、何よりもまず自分自身に対して表現することができないことになる。自分自身の体験におけるこの極めて不安定な当事者の位置

<sup>5</sup> Pétrement, p. 355.

<sup>6</sup> ただし、この友人は後に考えを撤回し、「彼女は、人が普通見るよりもはるかに深く見てきた」と考えるようになった(Pétrement, p. 355)。しかし、いずれにしても、さまざまな身体的・精神的理由から他人以上に物事を強く感受し、深く苦しむというヴェイユの個人的資質は、解釈者がそれに最初に拠って彼女の体験や思想を判断すべきものではないだろう。こうした資質が結果的に彼女の認識を歪めることになるのか、あるいは他人よりいっそう深く正しい認識を与えることになるのかは、判定が困難だからだ。

が、他人への体験の「伝わりがたさ」の源になっているとは考えられないだろうか。

小論が考察したいのは、彼女の体験の伝わりがたさの震源となっているこのような当事者の問題、すなわち「人間が物となる」と語られた体験において、「当事者が自分自身に対してこの体験を表現する言葉を持たないのはなぜか」という問題である。ヴェイユの主張を詳細に見ていくと、この問題の背後には、体験における当事者の悲惨な共犯性、すなわち自分自身を物にしてしまう出来事への当事者自身の加担が存在することが明らかになる。そこで、2では「人間が他人の意志に委ねられた一つの物になる」という体験の詳細を、ヴェイユの叙述から具体的に明らかにしよう。次いで、3ではこの体験がなぜ当事者自身にとって表現困難なのかという問題を、動機システムの篡奪と当事者自身のこの体験への加担という観点から考察してみたい。

## 2 . 工場体験の詳細

工場労働の最中にヴェイユが記した「日記」には、彼女がした作業の内容、仕上げた注文の数、作業にかかった時間、得た報酬、周囲の労働者や上長の様子、彼らの会話などが、日々事細かに書き残されている<sup>7</sup>。彼女の仕事は自動車工場での部品の型抜きや裁断、鋳打ちなどの、主として女子未熟練工が携わる単純労働だった。作業に要した時間は時間測定係がストップ・ウォッチで測り、賃金は出来高制で計算される。仕事内容は予告もなく下される上長の命令によって次々と変わった。未熟練工に要求されるのはただ二つ、作業の速さ（考える間も与えない単調で慌しい動作の繰り返し）と上長の命令に対する服従のみだった（60）。ヴェイユはこの状況を後に次のように描写している。

「ほとんどの労働者は命令により、単純で果てしなく繰り返される五つか六つの動作を全速力で行う。一つの動作にかかる時間は約一秒だ。部品を入れるケースや機械の調整工を探して、あるいは他の部品を求めて不安に走り回る時を除けば、上長がまるで物のように彼らを取り出して別の機械の前に据えつけにやってくる瞬間まで、労働者には休む間もない。そして、また別のところへ移されるまで、彼

<sup>7</sup> 「日記」は *La Condition ouvrière* 所収の *Journal d'usine* を指す（77-204）。

らは据えつけられた新たな機械の前に居続けるのである。こういう人々は、人間がなりうる限りで物である。しかし、意識を失うことが許されない物である、なぜなら、突発的な出来事にいつでも対応できなければならないのだから」(336f.)

ここには、働く人々から思考を奪い、無感覚にさせる仕事の単調なスピードの問題がある。加えて、その単調さに唯一変化を与える「別の仕事に移れ」という上長の命令は、「まるで誰でもいつでも場所を移し変えることのできる生気のない物」(332)に下されるかのように労働者に落ちてくる。ヴェイユは、これ以外にも労働者が受けるさまざまな扱いを記録しており、その中には序で挙げた「身分証明書」も含まれる。こうした労働の状況について、後に彼女は、それ自体としてはごく些細なさまざまな苦しみか耳元で「お前はいつでもよい人間だ」と絶えずささやき続けるがゆえに、やがて労働者は自己のもっとも奥深いところで自分を何ものでもない無価値な存在だと認めてしまうようになると記している(331)。そして、これは事実、彼女自身に起こった変化だった。

ヴェイユは自分のもっとも奥深くで起こるこの変化を正確に表現するのがいかに難しいかを、既に工場で働いている時点で自覚していた。最初の工場では約一ヶ月を過ごした頃、彼女はごく親しい友人に向けて「言わなければならないことはたくさんありますが、核心(essentiel)を言い表すことができません[...]言うためには別の言葉が必要なようです[...]言い表すことができないものを言おうとすれば壊してしまいます」(51f.)と手紙を書いている。また、同じ手紙の中で、実際に働いてみて変化したのは工場労働について自分が以前から持っていた一つ一つの具体的考えではなく、それらは変わるどころか逆に強められたと述べ、変わったのは物事に対する自分の見方全体、つまりは人生に対する感情それ自体だと告白する(51f.)

一つ一つの考えは一切変化しないままに、しかしそれらを見る自分の視線が根本的に変わったと言う時、不可逆的な変化を被っているのはそれらを見ている自分自身に対する自己認識にほかならない。つまり、ヴェイユが一ヶ月余りの労働体験で早くも変化したと感じているのは、先に述べた自分自身の価値に関する認識である。彼女自身がこの変化を被ったのである。しかし、自分自身の価値に関するこの認識は、客観的に検証できる「一つ一つの具体的考え」とは次元を異にしていた。自分を根幹から変えるそうした大きな変化がなぜ起きたのか、それによって新しくもたらされた自己認識が何を意味するのかを説明するどころか、この新しい認識そ

のものを誤解なく他人に伝えることすら、ヴェイユには困難を極めた。

ヴェイユは自分に生じたこの変化を、肉体労働やそれに伴う疲労に対する、あるいは他人や規律に従うことに対する自分個人の嫌悪感から生じたと思われることを非常に懸念していた。むしろ畑仕事に朝七時から夜十時まで従事した時には、耐えがたいほどの疲れはあっても純粹で深い喜びを見出したこと、また規律が人間的でありさえすれば、労働の能率に必要なあらゆる規律に最大限の善意をもって進んで服することを、彼女は強く訴える(283)。つまり、ヴェイユの主張に沿えば、彼女を変えたのは決して単純な肉体的疲労や他人へ服従することそのものの辛さではなかった。彼女に根本的な自己認識の変化をもたらしたのは、そうした肉体的疲労や他人への服従がどのように人間に課されるかという、その形式(forme)である。たとえば、工場労働の約八ヶ月後、ある工場の技師長へ宛てた手紙の中で彼女は次のように述べている。

「私を打ちのめすのは従うことそれ自体ではなく、精神的に耐えがたい結果を伴う特定の従い方(certaines formes de subordination)なのです。たとえば、従属がただ従わねばならないということのみならず、気に入られるように絶え間なく気を遣うことを意味する場合、私には耐えがたく思えます。他方、知性や創意工夫、意志、職業意識が上長の命令を成し遂げることにしか用いられず、命令を実行するために必要なものと言えは知性も心も無関係の受け身の服従でしかないような従い方を、私は受け入れることができません。このような場合、従う者は他人の知性によって支配されるほとんど物のような役割を果たすことになります。しかし、それが女工としての私の境遇でした」(240)。

このような「従属の形式(従い方)」が払拭されない限り、何をどのように具体的に換えようとも、たとえ労働時間を二時間に短縮しようとも、それは悪の原因に何ら影響を与えず、人間が一つの物になるという労働者の根本的状況は変わらないとヴェイユは考えていた(343f.)。それゆえ、彼女はこの非人間的な労働の形式とそこから生じた根本的な自己認識の変化を周囲の人々に伝えようと、繰り返しさまざまな言葉で訴えた。しかし、それはほとんどの場合誰にも届かず、むしろ拒絶されたように思える。少なくとも、彼女自身はそう語っている。後に、ヴェイユは、雌鶏たちが傷ついた仲間集団で飛びかかってつつく現象を例に挙げて、あらゆる人がこれと同様に不幸な人間を侮蔑する動物的性質を持っており、意識しようがしまいがこの性質が他人に対する態度を決めてしまうと述べた(AD73,

AD104)。周囲の人々が不幸な人間を侮蔑するこの現象を、ヴェイユは自分のほとんどすべての友人たちに起こった事柄として語り、自分がこの傷ついた一羽であったことを示唆する<sup>8</sup>。

この「伝わりがたさ」の原因は何だったのだろうか。序にも述べたように、多くの人々は彼女の体験とそこから生じた認識を、生まれて初めて他人から否応なしの命令を受ける過酷な工場労働に触れたインテリの悲鳴として受け止め、辛い個人的体験を余りにも一般化した、過剰に悲観的な報告として捉えたように思われる。ヴェイユがよく使う「奴隷状態」という労働者に対する認識も、実際の労働者にとっては逆に面食らい、場合によっては鼻白むものだったかもしれない<sup>9</sup>。強靱な精神と肉体を持つ生まれながらの労働者階級の間人であればこれほどの打撃は受けなないところを、たまたまヴェイユだったからこそ「人間が物となる」と認識されるような奴隷状態に陥ったのだ、と。

このような理解はあながち外れてはいないだろう。しかし、これもまた序で述べたように、ヴェイユの体験の伝わりがたさは、彼女自身の主張の内容からまず考察されねばならない。その考察に基づいて、後から周囲の人々のヴェイユに対する視線を、すなわち「たまたま彼女だったからこれほどまでに苦しんだのだ」という理解を振り返る時、それは別の深刻な意味を帯びて見えてくるだろう。周囲のこのような視線は、ヴェイユの体験に対する冷静かつ正当な評価でもなければ、また逆に周囲の故意や過失による無理解でもない。むしろ、ヴェイユが伝えようとした事柄の性質から必然的に生じる、彼女と周囲の人々とのより正確にその起源を確定するならば彼女自身の中にまず生じたある種の断絶を示している。これについては、3の最後で再び振り返ることになるだろう。

さて、ヴェイユ自身は自分の体験が他人に伝わらない原因の根幹に、この体験そのものが持つある特殊な事情を見ていたように思われる。人間が他人の意志に委ねられた一つの物になるというこの体験は、人間である当事者の持つまさに人間的な構造を利用して起こったものであり、それゆえそこでは物にされる当事者自身が

<sup>8</sup> もちろん、このよく知られた箇所、ヴェイユは周囲の人々の無理解を嘆いているのではなく、人間を支配する「機械的必然性」(AD73)について述べているのである。この箇所を含め、小論で扱った問題は、この後のヴェイユの不幸論や宗教論の脈絡において再検討されねばならない。しかし同時に、彼女は自分の思想の基部を、常に極めて具体的な個々の体験に置いている。小論ではこの点に注目し、ヴェイユの具体的な工場体験にテーマを絞り込んで論述を展開した。

<sup>9</sup> Pétrement, p. 330, p. 373.



非常に奇妙な仕方では体験の共犯者となっているのである。3では、この問題に関するヴェイユの主張を検証する。

### 3. 動機システムの篡奪と当事者の加担

工場労働の約七年後、一九四二年に書かれた論考「神への愛と不幸」において、ヴェイユは、不幸な人は魂の奥底にまで浸透するような自分自身への深い軽蔑と有罪の感覚を持っていると述べる。彼女は旧約聖書のヨブを例に挙げて次のように言う、「ヨブがあればほどまで絶望的な口調で自分の無実を叫ぶのは、彼自身に自分の無実が信じられないからだ。彼自身の中で、魂が友人たちの味方をしてしまうからだ」(AD103f.)。ヨブにとって、無罪を証明する自分の良心の声は、もはやぼんやりとした死んだ記憶でしかない(AD103f.)。さらに続けて、彼女は「不幸のもう一つの影響は、魂に無気力の毒を注ぎ込むことによって、魂を少しずつ不幸の共犯者にするのである。十分に長く不幸であった人は、必ず自分自身の不幸に加担している」(AD105)と言う。

こうした言葉は、「人間が他人の意志に委ねられた一つの物となる」というヴェイユの体験が、文字通り「人間が人間でなくなる」という意味、すなわち肉体のみでどのような精神的作用も持たない、他人の言うがままの操り人形になるという意味では当然ないことを示している。物となった人間は、自分を侮蔑する精神の動きを持ち、自ら共犯者として自分に起こった出来事へ加担している。このような人に起こっている現象は、この人の人間としての構造を破壊してはいない。むしろその構造を隠微に篡奪し利用する仕方では、この人自身の自由な意志をどうしようもなく巻き込みながら、この人を人間のまま物にする現象である。したがって、この人は自分がまだ人間であることを自覚しながら、同時に物であることに甘んじている。不幸において最も悲惨な当事者の自分自身に対する侮蔑は、どうしても拭うことのできない当事者のこの加担の可能性から生じる。ヴェイユがこの可能性を強く感じた現実の体験が、工場労働にほかならなかった。

では、当事者はどのようにしてこの状況に巻き込まれ、そこに加担させられていくのか。ここには幾重にも入り組んだ巧妙な加担のメカニズムがある。このメカニズムは、可能性としてはそこからの逃げ道を残しながら(それゆえ当事者は決し

て免責されない) 事実としては決して逃げることのできない(それゆえ当事者は必ずこのメカニズムに巻き込まれることになる) 巧妙な罠である。ヴェイユの主張から、それを明らかにしてみよう。

手がかりになるのは、「人間のあらゆる行動には動機が必要である」(338) という視点である。人間が行動する時、そこには必ずその行動を選択した動機がある。しかもその動機は、人間の行動について言われる限り、かつてカントが「選択意志の自由」という問題で論じたように、行為者本人が自分でそれに従って行動しようと、自らの行為指針の中に自分で採用したものでなければならない<sup>10</sup>。同じ問題への注目をヴェイユは次のように喚起する 「工場が要求するひどく疲れさせる受け身の状態に自ら服するためには、自分自身で動機を探さなければならない。というのも、工場には鞭も鎖も存在しないのだから」(338)。ヴェイユが経験した近代工場での労働者の服従には、「鞭や鎖のようなはっきりとわかる強制」(273) があるわけではない。その服従は、労働者自身が「自分の中の最もよいものを抑えて[...] 自分の意志で服さねばならない」(285) という形をとる。

しかし、こうも言えるのではないか。工場労働における服従は確かに鞭や鎖で強制されはしないが、しかし従わなければやはり生命に関わる類の、たとえば解雇されて、ひいては飢死を招くような服従である。事実、ヴェイユは何らかの理由で工場労働が要求する作業の速度についていけなくなった場合、それはやがて疲労困憊から病へ、さらに死へつながると述べている(104, 271)。そうであるとすれば、その服従は鞭や鎖による強制労働の場合と同様に、自分の意志によって自ら行われたというよりは、やむを得ずに強制されて行われたものと見るべきではないのか。

この問いに答えるためには、ヴェイユが「自分の意志で服従する」と言う時に何を念頭においていたかを、よりいっそう明確にしておく必要がある。たとえ鞭や鎖で、あるいは「剣」(420) で強制された場合であっても、「潔く死ぬ」ことを選ばずそれに屈して奴隷になった人間は、その瞬間やはりある特定の動機を自らそれと知って受け入れ、自分で奴隷になることを選んだのである。このような選択が悲惨であることは疑いえない。しかし、他人の目からどう見ても「やむを得ない」状況であったとしても、だからと言ってそれが当事者にとって自分の選択でなくなるわけではない。もしこの状況がいかなる点から見てもまったく自分の選択の契機を

<sup>10</sup> Immanuel Kant, *Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft*, Kants Gesammelte Schriften, hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Band , p. 24.

含まないとしたら、そこにはいかなる悔やみも屈辱も存在しないだろう。ヴェイユが工場労働で直面したのは、人間のあらゆる行為が持つこの自由な動機選択の構造と、この構造を意図的に利用して人間の精神そのものを搾取するシステムだった。彼女が「鞭や鎖があれば、変身はきつともっと簡単になるだろうに」(338)と言う時、考えられているのは鞭や鎖を理由とする当事者の完全な免責ではなく、当事者が「この選択はやむを得なかった」と自分自身に言い聞かせ、自らを宥めうるある種の余地にほかならない。しかし、先に述べたように、人間の行為においてこの種のやむを得なさは当事者の自由な選択と完全に両立しうる。そこには宥めるべき当事者の悔やみがあり、この悔やみの背後にはそれを生んだ当事者の自由な選択が確実に存在する<sup>11</sup>。

さて、ヴェイユによれば、労働者は上長の理由のない身勝手な命令に服従し、仕事の単調な速度をひたすら維持するために、自分の中の最もよいものを抑え、目の前に差し出された二つの動機を自ら進んで採用せざるをえないところへ追いやられる。その二つの動機とは、「叱責や解雇への恐れ」と「金銭の誘惑」である(228, 285)<sup>12</sup>。これらの動機を選択して、労働を続けるためのエネルギーにする時、労働者自身は言わば自発性を強制されるような仕方で、「自分を物にする」ことに屈辱的に加担してしまう。

このような加担のメカニズムは、先程来述べているように、理論上は常にそこからの逃げ道を残している。ヴェイユが自分の体験を語る際にもっとも表現しがたさをにじませるのは、「しかし、やはり奴隷にならないこともできたはずだ、結局

<sup>11</sup> この問題もまた、カントが「根本悪」として論じた問題、すなわち過失であると同時に故意の罪責でもある、「魔がさした」としか言いようのないある種の人間の経験と重なっている(cf. Kant, p. 37f. )。そこには、明らかに「私の自由にならない何か」があるが、他方、魔がさす瞬間に誘惑されたのはまさしく私であり、私はやはり自由にそれを行ったのだ。私の意識の中で、この瞬間に起こった出来事は決して免責されない事態として残り続ける。こうした問題は、たとえば「道徳的運(moral luck)」の問題につながる可能性がある(Thomas Nagel, *Mortal Questions*, Cambridge University Press, 1979, pp. 24-38)。

<sup>12</sup> ここには、動機の問題をめぐる近代の工場労働に特有の意図的手口がもう一つ示されている。労働者の前には、命令だけではなく、命令に従うための動機もまた周到に用意されている。これらの動機は知性にではなく、恐怖と誘惑という生存に関わる「感情」(228)に強く訴えかける。単に従うことではなく、ある種の従い方が、つまり2で触れた「従属の形式(forme)」が促されているのである。服従のためにこの種の動機が用意され、労働者がそれを疑うこともなく選択せざるをえない状況が、近代の工場労働のもっとも大きな問題点である。ヴェイユはこの問題を「奴隷的でない労働の第一条件」という論考(418-434)で取り上げている。しかし、そこでは、宗教的体験を経て初めて自覚的に工場体験と結びつけられる善、美、神が大きなテーマとなっており、動機の問題もそれとの関連で論じられている。それゆえ、小論ではこの論考の内容を扱わなかった。

お前の選択によって陥った屈辱であり、お前に強い魂がなかったからそうなったのだ」という周囲の、より根本的には自分自身の声に接する時であるように思われる。たとえば、工場労働の一年後に、親しい交際のあったドウトーフに対してヴェイユは次のように書いている。

「先日あなたが私におっしゃったことに私は強い衝撃を受けました。あなたはこう言いましたね、尊厳とは外的なふるまいとは関わりのない何か内的なものなのだ、と。それどころか、数々の不正やひどい侮辱や勝手気ままな命令をだまって逆らうことなく耐えても、尊厳が消えうせるわけではないということはまったく真実です。強い魂を持っていれば十分なのです」(283)

このように述べた後で、ヴェイユは「それゆえ、私が牛馬のような奴隷状態に陥り、尊厳を回復するのに大変な努力を必要としたことについて、『お前に精神の強さがなかったから、そのようになってしまったのだ』と結論してくださってかまわない」という旨の文章を続けている(283)。もちろん、ヴェイユは決して心からそう思っているわけではない。しかし同時に、ヴェイユには彼にそう言わねばならない正しい理由もあった。なぜならば、「強い魂」の強さは理論上どこまでも拡張可能だからだ。ヴェイユが後年、「ある人を不幸に投げ落とすその同じ出来事が、別の人にとってはそうでもないことがある」(AD101)と述べて、不幸に個人的な「閾値」(AD101)を認めるのにはこのような理由がある。不幸と不幸ではないものを分ける閾値には個人の資質が関係しており、その境界線は「純粹に客観的なものではない」(AD101)。それゆえ、ヴェイユはドウトーフに対して、「この境界を越えているのだから、どんなに強い魂でもこれを耐えることはできなかった。それゆえ、私の苦しみは私個人の弱さのせいでは起こったことではなく、私個人の選択にその責任を帰されるべきものではない」と正当に訴えることができない。彼女は、そのような客観的境界線を彼に示してみせることが決してできない。それどころか、いっそう悲惨なことには、彼女は自分で自分にそれを示して自分自身を義とすることができない。

不幸な人が自分の体験を訴える声を失うのは、この時である。理不尽な上長の命令に屈し、屈するために目の前に用意された解雇の恐怖と金銭の誘惑という動機に思わず手を伸ばしたのは、それがいかにやむを得なかったとは言え、やはり自分の弱さゆえの選択だった。どのような理不尽な扱いを受けようとも、自分だけは自分を信じ、自分の尊厳を保ち続けることは、可能性としてはできたはずだ このよ

うにして、他人だけではなく当事者さえもが心の奥底で自分に「強い魂」を要請し、自分が打ち碎かれた責任の一端を自身の弱さに見ようとする。その結果、この体験の中では当事者自身が自分を有責とし、「私は取るに足りない者であって、物として扱われるのはまったく当然のことである」と何よりも自分で感じてしまうのである(150)。人間の自分自身に対する侮蔑の意識は、他人が自分を物のように扱い、辱めた出来事から直接生じるのではない。そうではなく、そのような出来事が繰り返される中で、最終的に自分自身がある動機を持って、自分の意志でこの出来事に加担してしまった可能性を、すなわち自分の有罪の可能性を意識することから生じる。だからこそ、その侮蔑の意識はいっそう深刻であり、当事者の魂の奥底まで侵食するのだ。

それゆえ、先のヨブの例はそのままヴェイユ自身にあてはまる。「ヴェイユがあれほどまで絶望的な口調で自分の無実を叫ぶのは、彼女自身に自分の無実が信じられないからであり、彼女自身の中で、魂がドウトーフの味方をしてしまうから」にほかならない<sup>13</sup>。

当事者の精神に生じたこの断絶、自分自身に対するこの不信は、当事者が自分に何が起こったかを自分自身に表現する言葉を永久に奪い、ひいては自分に起こった不正を他人に訴えるための合理的な言葉を奪う。当事者自身が「自分が物として扱われる」ことに加担し、その加担を意識し、「私のような者が物として扱われることはまったく当然である」と自分で認めてしまう時、その扱いが決して当然ではなく不正であることを他人に訴えることなどできるだろうか。周囲の人々もまた、当事者の精神に生じたこの深い断絶のために、当事者に何が起こったかを決して言い当てることができない。それは周囲の人々の個々の故意あるいは過失による無理解ではなく、以上のような当事者の人間としての自由な動機選択の構造から必然的に生じてしまう、避けることのできない無理解である。

#### 4 . 結び 回復された「尊厳」とは何か

以上、ヴェイユの体験の伝わりがたさを、彼女が伝えようとした事柄そのものの性質から考察してきた。「人間が物となる」というこの体験では、当事者の人間ゆえの自由な意志が、その自由であることに巧妙につけ込まれるような仕方で利用さ

<sup>13</sup> 序で触れた、ヴェイユ自身が主張する自らの「ほとんど無限の適応能力」は、それが事実であるかは別として、彼女のこのような無実の叫びとしても理解されうるのではないだろうか。

れていた。そのようにつけ込まれ、最終的に自らこの体験の共犯者となってしまうことへの有罪の意識が、当事者の自分自身に対する深刻な侮蔑を生む。ヴェイユがしばしば引用する「人間は奴隷になったその日に魂の半分を失う」(AD98)という言葉は、失われたのが魂のすべてではなく、半分であることが悲惨なのだ。それは、残った魂が失われた魂を永遠に悔やみ、自分で自分を侮蔑し続けるからである。

しかし、この体験の「伝わりがたさ」をめぐるのは、触れておかねばならない重要な問題があと一つ残っている。それはこの体験を通して回復された「尊厳」の問題である。働き始めて約一ヶ月後、中耳炎で労働を一時中断した時、ヴェイユは自分が屈辱的な奴隷状態に陥っていることをはっきりと意識し、こういう生活の中でも立ち直れるようになる日まで耐え忍ぼうと決意した(59)。そして、最終的に「ゆっくりとだが、苦しみの中で、奴隷状態を通じて、人間としての自分の尊厳を取り戻した」(59)。こうして回復された尊厳は、やがて後のヴェイユの思想の中で大きな位置を占め、神や善の問題に深く関わることになる。しかし、ここでは工場体験の範囲内に絞り、この尊厳の伝わりがたさに簡単に触れることによって結びに代えてみたい。

ヴェイユが回復した尊厳とはどのようなものだったのだろうか。まず、それは決して「強い魂」ではない。なぜなら、3で見たように、他人から物のような扱いを受けることを通して、つまり自分の尊厳の外的な扱いどころをすべて失うことを通して(59)、永遠に打ち砕かれたのは、結局このような扱いに抵抗しうる、より正確に言えば抵抗することが可能性としてはできると常に考えられる、自分自身の「強い魂」だったからである。

したがって、回復された尊厳は奴隷状態に抵抗するものではない。しかし、それは奴隷状態とは無関係の安全地帯が見つかったということでもない。それどころか、この尊厳は奴隷状態そのものにもっとも深くつながった尊厳である。というのも、ヴェイユが見出したのは、「完全に奴隷である」ということがそのまま「人間としての尊厳」になるような人間のあり方だったからだ。しかし、これはいったいどのような事態だろうか。

手がかりは、ヴェイユが尊厳について述べた次の文章にある。彼女は工場体験の約七ヶ月後に次のように手紙に書いている。「避けることができない肉体的精神的苦しみを、どうしても避けることができないものに正確に限定した上で受け入れること、それが自分の尊厳を守る唯一の方法です」(232)。ヴェイユはここで、状

況が自分に求め、強いるものを、水増しすることも割り引くこともなく、過不足ない仕方でありのままに知って受け入れ、それに従う人間のあり方を示唆し、それが自分の尊厳を守る唯一の方法だと言っている。同じ人間のあり方を、後に彼女は「従順 (obéissance)」(AD38) という言葉で触れて次のように語った。「一番美しい生活とは、すべてが状況の強制によって、あるいは感受性や理性から来るものとは本質的に、明らかに違う衝動によって決定される、まったく選択の余地のない生活であると、私にはいつも思われました」(AD38)。

こうしたヴェイユの叙述は、人間が正しく奴隷になること、すなわち正しく完全に物になることこそ人間の真の尊厳であると言っているに等しい。一切の恣意を捨てて状況が求めるところにただひたすら従う従順を、彼女は尊厳と呼ぶのである。しかし、「人間が物になる」という奴隷状態の屈辱を、その伝えがたさの中からあれほど伝えようとするヴェイユが、同時に「正しく完全に物になることこそが、奴隷状態の人間が回復しうる真の尊厳だ」と結論するとすれば、それほど「伝わりがたい」ものはないだろう。

しかし、この結論は完全に筋が通っている。奴隷状態となり、「強い魂」を自分の内部から打ち砕かれた人間は、かつては持てたかもしれない高い動機、すなわち恐れや誘惑ではない動機を持つことはもはやできない。尊厳を回復するとは、高い動機を回復し、それによって自らを義と認識し直すことでは決してない。そうであるとすれば、そのような人間が尊厳を回復しうる突破口はただ一つ、「いかなる動機も持たない」という可能性だろう。それは人間としての構造を、つまり動機を自ら選択する自由を完全に放棄することであり、人間ではないものに、すなわち完全な物になることにほかならない。

ヴェイユはこの点について、後年次のように記している。「『原動力がないのに、どうやって行動するのだろうか？ 何を理由に行動するのだろうか？』と人は言う。しかし、それこそが超自然的な奇跡である。お前の中にあるすべての動機を、あらゆる原動力を黙らせよ。それでもなお、お前は行動するだろう、動機や原動力ではないエネルギーの源に動かされて」(OC -2 350)。「超自然的な奇跡」とあるように、この問題はヴェイユの中で宗教へ、神に対する従順へと明らかにつながっていく。しかし、このようなことが本当に可能なのか。工場体験を通してヴェイユが見出した尊厳の可能性とは何を意味しているのか。動機ではないエネルギーとは何か。こうした問題については、また別稿で考察してみたい。

**キーワード:**

工場労働の体験、動機、人間の自由、尊厳

**KEYWORDS:**

Factory-labor experience, motivation, freedom of human being, dignity